



日本ラグビーの明日

スポーツジャーナリスト 藤島 大

W杯の検証基に強化

ふじしま・だい 61年東京生まれ。早大卒。スポーツニッポン新聞社で野球、ラグビー、ボクシングなどを担当し92年独立。著書に「知と熱」「熱狂のアルカディア」「相田の確執」など。早大ラグビー部などのコーチを務めた。

も注目の才能を確かに培った。この国のラグビーには独自の歴史と文化と機能が顕然としてある。

しかし、その日本ラグビーが揺らいでいる。ジャパン、日本代表が先のW杯で未勝利に終わり、勝てないだけでなく、試合の内容が本物の感動に届かなかったからである。根強い支持層に支えられてはいるが、一般の関心は薄くなり、8年後に決まっているW杯自国開催の成功にも不安はよぎる。

ジャパンのジョン・カーワン（ヘッドコーチ）は、主軸を母国のNZ出身者で固め、日本選手には体格を求めた。強豪国のコピーのようなスタイルは結局、W杯の場では白星をもたらさなかった。1分け3敗の結果は、怒りというより感情移入できぬ虚しさをファンに残した。

では日本のラグビーはどう変化すべきなのか。それはジャパンの強化に尽きる。W杯の成績が今回のように行き詰まり、普及や国内試合の観客動員が停滞すると、どうしてもシステム改革に思考は飛びがちだ。「大学ラグビー再論」は典型である。

高校のトップ級選手が大学に進み、その年代に世界との差は広がる。もっと早くから上のレベルでプレーさせるべきだ。そのためのシステムを。間違っている。ジャパンの低迷の理由

は、下部や底辺ではなく、トップレベルのジャパンそのものにある。考えなくてはならないのは、この環境であっても、ひとりの賢者がジャパンの監督に就いていたら、よりの確かな選手選考は行われ、よりよい戦法を構築、好成績のみならず、ファンの気持ちをつかむ試合もできていた。そうならば広く関心と呼び、メディアを通じた普及へと結びつく。ジャパンの強化とは、最も簡潔な人気獲得策でもある。

そのためには、先のW杯の徹底したレビュー、振り返りが求められる。カーワンのジャパンはいつどこをどう誤ったのか。そもそも、なぜ選ばれたのか。強化費は有効に使われたのか。誰に責任があるのか。利害のない立場から根拠をはっきりさせて、日本ラグビーの地図を描き、それを標準としながら新指導者を選ぶ。そうでなくては、いつかまた道へとまた迷い込む。

日本協会は、まずジャパンの強化に力を傾注、ついで現在、一部の人間や地域に献身と協力で保たれているラグビーの環境を把握、支援しなくてはならない。

たとえば、定山侯に理想の芝のグラウンドを実現させた北海道ハーリアンス、あるいは北海道で地道にタグラグビーなどの普及に努める、よりづかむちよいスポ倶楽部など、大切な「ラグビーの細胞」を筆者は知っている。全道、全国のそうした環境、運営者の尽力にもっと目配りをして、いまある資源を手放すことのないように誠意を尽くすべきだ。

幸か不幸か、日本のラグビーに「システム」をもてあそぶ余裕はもはやない。

マイケル・リーチ。23歳、Fリーグの血を引くニュージランド(NZ)人だ。

先のラグビーのワールドカップ(W杯)日本代表の中心的存在だった。FWのフランカーとして、速く、賢く、粘り強い。トンカ戦では試合には負けたのに最優秀選手に選ばれている。

リーチは、札幌山の手高校から東海大学へ進み、本年度からトップリーグの東芝ブレイブルパスへ加わった。留学のための来日時には、やせっぽちの愛らしい少年だった。だから助っ人ではなく、ホームグロウン、つまり「この国育ち」である。

となく批判されがちな学校スポーツ、日本の高校、大学ラグビーの土壌が、海外の強豪クラブ